

内山永久寺記録

森 末 義 彰

内山永久寺は大和山邊郡にあり、鳥羽天皇の御願に依り、大乘院頼實が永久年中に草創する所であると傳へられて居る。その後頼實から弟子尋範に傳へられ、爾後興福寺大乘院の管する所となり、平安朝末期から鎌倉・室町時代を通じて、大乘院末寺として盛大であつた。

今こゝに鎌倉時代中期頃の永久寺の有様を傳へた二種の記録から、その伽藍・堂舎・佛像等に關する記載を抜萃することゝした。

先づ最初に内山之記は、古く内山中院より大乘院に傳へられたが、現在は徳富猪一郎氏の成實堂文庫に架藏されて居る。成實堂古文書目録に依ると、「興福寺大乘院末寺大和内山永久寺の記録なり。平安末期より鎌倉末期に至る。佛像諸堂舎等の造立のこと、諸供養のこと、弘長元年九月の後嵯峨上皇並に大宮院の春日神社御參詣及び南都七大寺巡禮、元暦元年七月の起請等、同寺々規、文永七年同寺鎮守社造營のこと等、永久寺を中心として、興福寺・春日神社に關する諸般の記事あり。室町初期の寫本なるべし。紙背文書あり。」とあつて、その大略を知る事が出来る。

こゝに抜萃したものは、右の解題に記された「佛像諸堂舎等の造立のこと」及び「文永七年同寺鎮守社造營のこと」とある部分のみである。

この二つの部分に就いて、更に補足的な説明を加へるならば、前者は、その首部に闕落があつて、その全貌を知ることが得ないが、永久寺の諸堂舎の佛像その他の來由を説明したものであることが明白に看取される。

この前闕の部分は、内山舊記に見られる如く、常存院に關する記事の後半をなすものである。之に尋で丈六堂・鎮守・眞言堂・吉祥堂・懺法堂等に就いて

説明がなされて居る。而して丈六堂の多聞天に就いて、「康圓云」と言ふ様な記事がある所から見て、本書のこの部分は、康圓の在世中、即ち文永・弘安年中を距ること遠からざる時代に書かれたものであらうと思はれる。こゝに於いて私達は、南都と深い關係を持つて居る木佛師や繪佛師の活躍のあとを見ることが出来る。康慶や快慶、その他康圓・覺圓・慶縁等、本誌第六十二號に研究資料として擧げた「中世長谷寺再建記録」と對照して興味あるものと思ふ。又尊智や尊連房朝命等、當時の南都繪所の繪佛師達の事蹟を見ることも出来る。その他堂舎の造營・修造等の場合の工匠の問題に關しても、建築史上の一史料たるを失はないものであらう。

後半の文永七年の鎮守造宮日記は、その最後に記されて居る様に、この造營に直接關係を持つて居た慈寛房隆惠が、造營直後に録したものである事が知られるもので、珍重すべきものであらうと思ふ。隆惠に就いてはこの時の勸進僧の一人であつた事が分るのみであるが、落成後の奉幣のことに關して、學業の行つたその記事が詳細に記述されて居る所から見て、恐らく永久寺の學業の一人であり、當時年預の一人であつたものであらう。こゝに於いて私達の興味を惹くものは、造營に關する記事もあるが、それにも増して、落成後に行はれた奉幣の儀の記事である。即ち山内の下部に依つて行はれた風流、禪業の猿樂、學業の田樂等がそれである。造營の終つた後、それを祝つてかゝる遊宴が行はれるのは、當時一般の風であり、この他にも例が見られる所であるが、この場合には、その有様が詳細に敘述されて居ることは、注目に値するものである。原本には二三錯簡があるので、訂正して置いたことをお断りしておく。猶本抜萃は史料編纂所々藏のレクチグラフ本に據つたものである。

内山舊記の原本は、茨城縣東茨城郡外酒門村菅孝次郎氏の所藏にかゝるものである。その巻首に

永久寺中院御經藏本也、不可出他所者哉、
とあり、更に巻尾にも

於此置文者、當山肝要者也、永可置中院御經藏者哉、

と記されて居る所から見て、もと永久寺の經藏に祕襲されて居たものが、永久寺の廢寺と共に流出し、菅氏の所有に歸したものであらう。本書はその最初に記されて居る如く、文保元年二月十九日に、永久寺の住侶某が、藥湯療養の際を見て、代々曆記を披見し、古老の傳を聞いて書き留めた置文である。前に擧げた内山之記に比して、少々年代は降るものであり、且記事の重複する所も少くないが、又前者に見られない記事も多く、然も前者が雜然として居るのに對し、本書は整然と纏められて居る。従つてこの兩者を相對比することに依つて、我々は鎌倉時代の永久寺の伽藍・堂舎・佛像等の全貌を知る事が出来るのである。本書は本願事・長者御祈願所事・寺塔并大喜院等事・本願忌日并墓處等事・佛事勸行事・雜事・山務管領次第・代々起請御教書等肝要事の八項目から成立して居るが、こゝに拔萃したものは、寺塔并大喜院等事の全部及び雜事の一部である。猶本拔萃は、史料編纂所々藏の影寫本に據つた事を付記して置く。

〔内山之記拔萃〕

○前 被讒害了、仍悲歎之餘、養父俊宗（等）學房本尊并一町餘水田、爲彼并寄進當山、然間師匠并管絃講衆、與力同心而造營此堂了、本尊者以外古佛、不知作者云々、

依敬害七大諸寺并高野等凡僧徒群集之所、皆合悲壞訴之間、本末牒狀上下騷動、大明神之御遷坐・衆徒之發向ニ可及云々、依之下手人高房管生六郎、於公家御沙汰被流罪了、猶主人頼重右衛門大夫、可被流罪之由、訴申之處、自關東、如南都訴訟可流罪頼重之由計申之間、流鎮西了、一寺開眉云々、依之五月八日ヨリ七ケ日、一山同心之佛事、五部大乘經供養・地藏圖繪・一日經等、初日堯兼、弁得業、第二了賢房、第三了圓、第四願圓法橋、第五助得業、東大寺、第六日淨緣房得業、弁實、第七日助僧都、良專、各二石、

但結石者十石、四十九日者師匠等沙汰、十三重石塔起立、供養導師中道房、

- 〔力〕 〔力〕 率都婆梵字事、源運（攝力）津津僧都筆也、
- 〔力〕 〔力〕 像大師事、正元（後十月下旬）々々之比、伊與法橋慶縁作之、（用力）途五貫也、彩色之外、
- 〔力〕 〔力〕 身彌勒事、正元二年六月比、自高島邊奉渡之、快慶作之、
- 一 南岳石塔事、文永四年八月中旬之比、本太入道日念起立之、人夫等滿山與力、一木像不動八大童子事、文永五年・同六年兩年間、康圓尾張法眼、造之了、諸方勸進、中尊六貫文、南座衆結縁、童子各二貫、但少々加増在之、
- 一文永六年五月廿六日疫厲祈禱之時、一尺一寸十一面造之、康圓法橋、則安置丈六堂了、
- 一 建長五年（癸丑）九月下旬比、眞言堂十二天四圖繪之、佛師尊蓮、同六年寅七月廿二日寺中掃除、分配諸坊了、
- 一 同十一月八日頭光寺供養、曼荼羅供也、一向當山沙汰、職業十二人、大阿闍梨蜜蓮房、同日万陀羅供養在之、
- 一 同十五日當山万坏供養、爲塔修理也、
- 〔力〕 〔力〕 同十二月十日酉尅許、本堂丈六阿彌陀、乍四鉢遍身流汗、（其）鉢自人身汗垂鉢也、仍晴世・資朝相尋兩人之（處）、滿山驚事也云々、仍十二日滿山持濟（齋）、自同日七ケ日□座無言・同音之尊勝陀羅尼百遍并每日行法在之、則一乘院御時被言上此子細之處、古木佛者常事也被仰出了、其後滿山惣別無別事、
- 一 建長七年（乙卯）二月比、寺中山水結構之、石立信堯房、
- 一 同三月十四日ヨリ塔修理始之、四月十一日終功了、
- 都合日數當二百八十四日也、檜皮六百并、此外古檜皮少々在之、用途合廿五石、（下斗定）檜皮直物・食物之外八升宛、（堂升）棟裏四月十一日也、合十八人、（度也）加鍛治定、御菜七種・汁三・白二升長、肴四種・粽十合、（祿下同シ）録物大工一石、引等二人七斗、長四人五斗、又二人四斗、連八人二斗、等分饗新一斗、都合八石五斗、軒切布二段・膝突一段・檜皮繩二百五十房、
- 一同八年（丙辰）二月十四日ヨリ吉祥堂前瀧結構之、信堯房、

康元二年_{丁巳}三月四日ヨリ大坊鈞殿造之、後三月并四月四日終功了、三月廿三日棟上、番匠十一人、大工三石、引頭一石五斗、長四人々別八斗、連五人々別五斗、饗新人別一斗、都合十一石三斗、御茶七種・汁三・飯白二升長、已上北座房主分沙汰、肴四種・粽十合・大瓶子三、已上大坊沙汰、膝突布一反・筵一枚、石居・柱立如形賜酒肴、

〔二カ〕
潤三月廿日比、鎮守燈爐造之、

一 正嘉二年_{戊午}三月十八日ヨリ八ケ日間眞言院勸進、於當山中道房說法、

正嘉三年_{己未}正月廿三日ヨリ北大門造營之、首尾八ケ日、大工宗俊、番匠五人、

同廿九日棟上、儀式、飯白二升長、御茶七種・汁三・大瓶子一・肴二種_{已上供僧・三味等肴}、錄物事、大工一貫、宗光大工息、五百、自余三人各三百文、饗新等分一斗、

一斗、

一 丈六堂事、今之堂舍者、廣瀬之金剛寺堂也、正面一佛即其佛也、後三尊者、本願御時自京都被渡本佛也、共不知作者、

一 障子丁ニ小佛二鉢在之、觀音者、被行觀音之悔過之故安置之云々、尺迦者、

內山御房御月忌佛也、房海阿闍梨說也、

一 二天之內多門天者、康慶作歟云々、康圓云、猶古佛也云々、修理之時御頭之

內在日記、

一 大黒、建長七年之比、大和君雲賀作之、

一 頻頭樓、正元々年之比、上野法橋覺圓作之、

一 同六口三昧者、自禪定院被移之、依之院家御領之内、此供内等在之、

一 十六羅漢、多武峯追覆之時取之、彼裏書云、多武峯谷經藏施入、僧玄蓮云々、

又伽陀奧云、借覺獻法橋唐本寫之了、繪工吉野蓮實房・當寺日向房也、當寺

別當消息云、尊重寺究竟本也云々、

一 鎮守事、

南者大河_{水屋牛頭天玉是也、御本地藥師、}

內山 永久寺 記 錄

中者春日_{一御前歟、御本地尺迦、不空異說如常、但當流不空翻案由可存歟、付自相有智、}

北者布留_{岩上權現、御本地阿彌陀、}

別社者_{妙理權現、御本地十一面、}

石神者懸橋也、古人云、觀音・虚空藏垂跡云々、

一 同一品經供者、和哥會衆結構也、

一 同杉障子繪者、英壽緣信房猿樂、筆也、

一 眞言堂事、東西障子繪者、繪藤三宗廣之筆也、

佛後障子四天等者、古物破壞之間、尊蓮法橋筆也、

八祖銘者、定信之筆也、兩壇大威德者、有私口傳、東ハ金銅、自聖人之時被

安置、西ハ木像、後造之云々、

一 同供僧、聖人之時始置之、

一 塔事、與禪定院之御塔同也、本願同之故也、

琉璃塔者、白河院御塔也、而本願御房申請之、被安置當山、尤重寶也、

一 同御舍利事、元仁二年三月廿一日笠置之法阿彌陀佛、西隆寺御舍利一粒施入

之、同年四月十六日當山現鏡房、西隆寺御舍利一粒施入之、同年五月廿八日

招提寺之金剛房大、招提寺之御舍利二粒奉施入之、

一 十六善神、尊智法眼之筆也、

一 吉祥堂事、尺迦三尊、不知作者、吉祥天者、康慶之作也、以外現佛也、凡此

堂者、自京都邊移之歟、

一 懺法堂事、於懺法衆之沙汰、自結崎之邊懷渡之、觀音者彼堂之本佛也、而堂

舍壞渡之後、數年結崎之邊塚中捨置之、爰連々彼塚有光明、近憐_憐之諸人成不

審、或夜行見之、此觀音之光也、仍在地奇特之由披露、依之彼堂舍賣買之勸

進當山之住侶隨信房奉迎其佛、雖然空送多年、爰建長五年之比勸佛供、座光

等修理之早、其勸進明眞・仙緣等也、其後

○以下脱落セル
モノ、如シ、

一弘長三年癸亥六月比、丈六堂葺之、皆新五十五石、下斗、棟裏事、六月廿六日午時、大工光遠、(祿)綠二貫、引頭三人、各一貫、久行、是宗、元久、長八人、各五百、連十八人、三百、饗所望ニ依テヒメマテ合二百、當時、酒肴許也、肴四合・酒三斗五升長、布三段折敷ニ、ヒサツキ一、ヲ・綿如常、鍛冶大工尻懸合三百遣、瓜一合・酒一升、依無奉公、少分也、馬場同前、依奉公同、大工也、其時錢直六升、本、

一弘安二年己卯十二月比、本堂クエムシヤウノ師子結構之

一文永三年癸十二月六日南大門建之、同七日梁上、番匠□人、大工宗吉、酒肴、碗飯等請取本物、供僧營之、

一文永四年丁卯三月上旬之比、爲實驗御影堂、延賢房・番匠宗吉參詣高野了、御影堂開ニ本式一重云々、二貫置之、寸法委細取了、同中旬之比(繪)ヲ突壞了、同六月十八日石立、小酒肴給了、無錄物、番匠二人、同七月五日斧始、即作事始之、小酒肴、錄物、大工三斗、權大工一斗許始之、同廿七日棟上、肴四合・瓜十合・酒二瓶子、大、饗所人別一斗、ヒメ飯・菜七種・汁三、北座房主分役也、錄物、大工宗吉馬一疋・布三端・米二石、引頭國末馬一疋・米一石、長四人一石三斗、此四人之内、宗近 大工之子、依大工之勸賞任五位了、裝束用途一貫文給之、連二人七斗宛、職事參當日許之間三斗、鍛冶大工 西京、五斗、馬場三斗、五位任狀以後日送遣之、使者承仕慶勝房、錢二百給之歟、

一玉加喜宮遷宮次、(第脱カ)弁才天也、依禪定院慈信、僧正御房御願勸請之、

弘安九年八月廿五日 亥尅、

先神分亂聲 次御遷宮慶雲樂、

次奉幣 次御供十天樂、次行法

次講問一座 次管絃講 次里神樂等

同廿六日午尅

先亂聲 次奉幣 次御供十天樂、

次捧物 次御馬足 次東遊
次振鉞ヒメ 行事舞賀殿、白拍子、延喜樂、

左 右

安摩 二舞

万歳樂 地久

蕪合一具、 新鳥蕪

太平樂 林哥

拔頭 八仙

散手 貴德

陵王 納蕪利

退出音聲長慶樂、

伶人

左近衛將監伯朝葛 同康朝

左兵衛尉同則忠 同朝季

同朝近 左衛門志有雄

同繁成 同弘久

左衛門志弘季

右馬允爲清 爲次

鎮守

三臺 皇仁

甘洲 登天樂

陵王 納蕪利

樂屋酒肴・捧物等沙汰委細在別、

一吉祥堂(厨)對子仕立事、

戶平之繪鎌庫極樂寺大佛師越前法眼 頼眞、筆也、對子之内四天者、紙形者法

眼書之、下薩摩法橋代官仁書之旱、用途皆新二貫文也、戶平之梵天・帝天者三貫也、內四天者、嘉元三年乙十二月一日法橋下向、自二日取向、同至八日二人シテ内陳四天像書之旱、

一經藏造營事、自永仁二年甲午三月十四日始之、石居・柱立四月八日、上棟八月十九日酉巳尅也、同冬比造營旱、

仍十二月十一日可奉彌勒道場入由、評定在之、佛供百坏許勸進諸坊、供養導師中院、行法一座、登高座・下樂等、轉供并彌勒講等管絃講也、

一鎮守造宮日記文永七年庚午

一寫殿在所事、令當社承仕・鐘槌・社壇之後山寶殿之北邊、建三間之假屋而、爲神主等造立之、

三所之寫殿、垣隔中板葺、泥障屋、三尺五寸間也、前少有空所、居師子・狛狗、正面懸簾、餘方垣板、御座用簾・薦、其上敷續帟、當于大宮西北、別儲白山寫殿、一間屋、南向也、御座等如前、又假屋之圍一段有餘、以柴木垣籠之、

所入雜物等

三輪板三束 唐竹十本 小竹廿本 繩少々 薦四枚 續紙四枚打敷新、簾一間以一枚半懸大宮、以今半枚用白山、

一奉移事、釋良辰、遷宮之時不備御供、

六月十四日寅尅、任先例令布留武雄彌宜奉移之、路次之間垣立障子、不令露顯、先三部亂聲、次奏音樂、此間奉渡之、先例雖爲賀殿、急、只今度奏万歲樂、只拍子、是偏依笛吹圓後隆現房之癡亡、更以不覺爲後記者歟、(可力)

一葺事、自同日葺始之、大工久國請取米七石、下斗定、支度奉葺之、手水屋爲宿所、雜事等諸坊之沙汰也、又軒付之時、雖所望酒肴、依無先例更無承引、楡皮二百圍直十貫五十文、但於軒者用古楡皮、不足代并棧之、竹釘一斗五升諸坊役、但不足之間、唐竹八十本垂木竹勢也、楡皮下地并新、諸坊役、臨期又造加之、釘鋒二百筋諸坊之役、坊別七九寸二支、棟槌之新、無而出之、諸坊役、以此釘鋒二百筋、各四筋出之、直各三百文、

凡板八枚棟泥障之新、直各七十文、合五百五十文、

一同軒伐事、

祿物白布一端、直二百五十文、麻苧少分、酒五升・瓜十五菓、

一棟裏事、七月十七日祭之、雖可爲去六月、依土用延引了、

番匠國長、依造棟木可座着之由、雖訴申無承引、

祿物

大工米一石、引頭一人六斗、長三人各五斗、連五人各二斗、

此外饗新各一斗下行旱、

饗膳式 白米一升飯本斗、御菜七種六種大供僧役、今一種三昧六人合、汁二三味之役、酒

二瓶子八升、鎮守供僧、看二合同役、

居看一膳 箸 土器等 已上大供僧之役也、

一棟祭時雜要等、

餅十二折敷米三斗六升餅、長合定、綿四兩 眞苧少分 厚紙一帖 散米五合 酒一提眞言堂供僧役也、

一金物米等用途奉加足事、

十四貫文山內・山外貴賤之輩奉加也、

一貫文或入法花經一日經書寫布施也、而勸進等勸山內右筆之人々、奉加其用途了、

四貫文南座并水世俗用途奉加了、

三貫文或入於布留社轉讀大般若一部布施也、勸進山內甚能人而奉加用途了、

已上廿二貫文

一朱塗事、大佛師尊蓮房法橋朝命、相共小佛師二人而參、懸五ヶ日塗了、自七月十二日塗始之、朱沙百五兩、直

四貫文、佛師手暇新錢一貫五百文并所塗殘朱賜之旱、又澆所付于丹器之朱五

兩許在之、加所賜之朱都合七兩也、則刻持歸南都之家、而其後妻女見夢吾家

皆悉塗朱砂、一室內又放赤光、如此夢想大略每夜也、加之月水雖經數日不得

止、(眞力)填卜占之謂神明崇、又夫法橋同見夢、所謂參詣內山鎮守之處、垂赤(懸)恨不

得拜見、爰則知此朱之所爲、悉奉返納當山旱、然後無此等事云々、靈驗揭焉

何事如之、彌疑丹誠泣仰其應者也、

一 丹并壁塗事、

白土三ケ日之間塗之、壁士故爲長入道之末子也、而作祈如大工日別一斗可賜之由、雖訴申無承引、仍下行八升了、

御殿之土居并後方塗丹五升、直米五升、丹塗作祈日別七升、三ケ日之功也、

一 繪馬事、繪馬與師子諸衆及異義、仍取探之處、取當繪馬書單、用途一貫文、佛師朝命、

一 蛙股鍍物事、往古無鍍物、今度令結構、又御前刻階打付新木而修造了、彼此五ケ日功也、木工宗親造立而奉加之、

同蛙股之彩色用途、一枚別各百文、加白山御殿左右狗防之彩色、用途合五百文下行佛師單、

一金物事、銅細工大工太郎冠者、

七月廿四日銅細工三人持參之、二ケ日奉莊單、金物之躰頗美麗也、用途不足之由、頻歎申之間、以錢二貫文賜別祿、又酒一瓶子四升、肴一鉢・毛立一石・瓜十菓給之、

懸魚金物九 高蘭金物四角 飛擔垂木瑠百廿一 差鴨柄瑠二 破風崎瑠大小六 柳葉六 瓶八 千木七具 鯉木瑠十二 擬法師四 花釘廿四

已上用途合十二貫文塗別祿定、

一 御正舛事、

且一枚奉禱之、用途三百文、代星林房、今中院急水瓶一賜之、御房、大施主也、

一 御簾事、都合四間、用途四百文、本以三百文令福智院細工之處、緣四筋也、

而先例傍例皆不吉之間、又以百文偏直三筋了、前後用途合四百文入了、

一同緣絹事、絹一丈二尺、用途三百文、空色染之、絹以外不足也、仍略裏之緣并増額之下單、

一同緣金物事、用深紙鍍之、深帟八枚入了、

薄用途七百文、加高欄之下釵字銀薄定、

深用途四百文、加釵字并白山御殿左右狗防竹節及燈爐定、深工彌六男、

一 御歸座事、路次之構如遷宮之時、

七月廿七日乙丑、戌尅御歸座也、先三部亂聲、次奏還城樂、此間御歸座、役人武雄之神人也、御歸座之後備御供、彌宜、承仕、鐘突、宮仕各一前宛賜之、其間奏五常樂破、罷出之時又奏五常樂念、

御供下事、彌宜、承仕、鐘突、宮仕各一前宛賜之、御前四前內、三前大供僧沙汰也、一前二人合力而調之、今一前者三昧六人合力而營之、

一 御膳式

白一升飯本斗、御茶七種 追物四種 八殿 御汁二 菓子一折敷用瓜、已上

一 役人彌宜祿物事、

能米三升、

寫殿依先例御歸座之後三ケ日不破之、晦日欲壞之處、於白山之御殿中神寶御釵、一在之、彌宜老耄之間、奉取落敷、即重召神人奉渡了、

一同廿八日山内下部等奉弊、(幣下同)即結構風流、相詵奈良之狂人里人也、而交之、學

衆烈當社之拜殿、禪衆於丈六堂大床見之、大略終日見物也、及曉景退散了、

一同廿九日禪衆等奉弊、召猿樂令遊之、樂頭如意 大夫此日當于拜殿之南邊、結構禪

衆之狹敷、立葉木用日隱、以寺床爲座席、無立柱茸上、

酒肴一具賜、即儲之庭上、酒肴式

筒大瓶二具 肴四合 口六寸五分折櫃 紙立餅十合 瓜十合

廿九日落付并次日朝出立饗膳式 隨人數而調之、

飯黑一升 菜五種 汁一已上上祈也、

飯五合 菜三 汁一已上從祈也、

同夕賜院飯一具盛外居、飯黑四斗、菜六種 汁二

祿物 能米二石後日送之、

一 八月二日學衆奉弊、召田樂法師令遊之、此日爲防雜人之亂入、鑽埒於西北兩方、法師原以手水屋爲出立所、徘徊鐘樓之西入自瀧上之邊、庭立出之後、着烈西埒之內、刀玉以下各例儀式也、合鼓之時極入酒肴、其後勝法師取八玉、

而增一兵明王等，吐狂言而催喚叨，凡四部如雲集，兩座如星烈，可謂希代之
 珍事也，豈非一山之光華乎，

法師原交名

千德 萬金 敷花 勝 明王 乙 千增 億德 龜松 春力 千世期 千代
 松 千鶴 乙倍 孫增此年十三歲云々，兼帶刀玉・高足，未曾有藝態歟、

酒肴式

交菓子十三合口六寸五分折櫃，書紫繪，學衆分老不論供僧，非供僧一合三人合營之。

一合別入物

白米四升餅長合定，形新竹一本副出之。煎物白三升粉伏菟四十枚，梅枝八十枚，亂壺二枚
 柚柑百廿 山老二把 暑預五本以薄樣捻尻，椿桃一升 夏梨子卅 百合草十
 柑子五 枝椎澆柿百五十
 下入二柿・梨子之間也，此分巨多，仍齊々餘了。
 居肴十三前盛白壺，居薄折敷，供僧之役。

大瓶一木大瓶入酒四斗，搗葉籠，以美麗薄樣造之，供僧一之沙汰，但於葉籠者公物也，以紫繪檀帶裏口了。
 唐瓶子二各入白米四升，以薄樣裏口，供僧之役，

看四合口六寸五分折櫃，書紫繪，供僧之役，

牛坊卅七把但此分齊々不足也。光煎白米七升，油二升，本斗定。唐粉新大豆一斗八升，白瓜

已上以長橫八竿持之，於山內召器量法師原而令荷之，一竿各付三人，二人荷之
 一人率 但於宰領者，童部少々相交了，

瓜一籠大和瓜六十，小班瓜百三十積之，居板而持之，供僧之役。

已上出庭上，

坵飯二具儲手水屋，一具落付新也，今一具夕食也，仍夕遣之，盛外居。

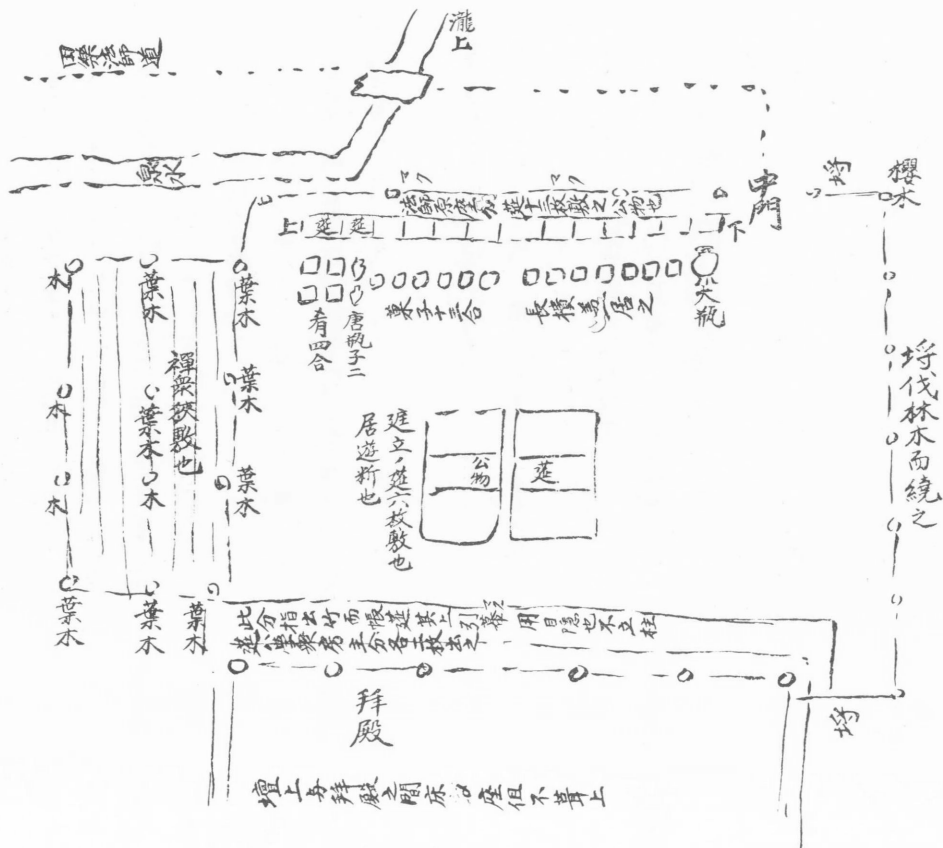
式 四斗飯 菜六合 汁二 酒一瓶子四升，折敷・土器等

已上二々度儲者，供僧之外上藪十八人除真言堂南向之座衆，沙汰也，九人落付，今日及
 曉景之間，田樂法師等□□了，仍明朝三日，令下知可賜飯由之處，不曉逃
 出了，甚有色之次第歟，

祿物能米三石後日被遣之，學衆分不論老若皆悉各八升出了。

此外雜要等

檀昏二帖種敷等新，立帶御幣 厚昏二帖等新也 庭造差圖
 榻榻四支立板新、
 厚昏二帖許法師原座 薄樣三重葉籠新、



一祈禱事、於拜殿勤行之、自六月廿一日七ヶ日誦尊勝陀羅尼、每日廿口反、又自七月十日七ヶ日轉讀理趣經、是偏行修理修造之間、無爲無爲之由、果始中終敢無災事、

右修造勘錄綱要如斯、

勸進

明眞仁蓮房、但依葬家無奉行、

仙緣現順房、寬盛善緣房、

已上造營勸進也、以公物沙汰也、

經算窓月房、頼玄舜禪房、仙緣寬盛、隆惠慈寬房、

已上金物・朱等勸進也、以貴賤上下之奉加奉莊嚴了、

寫本眞言堂庫之唐櫃在之云々、

一鎮守御殿破損之間、爲修理正應四年卯七月十七日寅尅御遷座移殿、任先例口

三尺五寸假殿三間、白山御後山造之、役人者布留社ノタケヲ禰宜也、是則

先例也、臨其期亂聲三度、其後慶雲樂、但背先例今度以可爲賀殿破云々、樂

之間奉渡御躰、其時者犬樂（是也）外立障子等、消御燈、御供等無之、其後兩三日修

理了、同廿四日戌時御歸座、臨其時如先三度亂聲、其後還城樂、如前奉渡御躰、

事了後取去障子等、（炬）燃御燈、其後備御供、其間奏五常樂破、罷出之時同急也、

御供者供僧三味役也、其色目、御飯本白一升・御茶七種・追物八種・御汁二・

御菓子一折敷、瓜也、供僧二人合三前、三味六人合一前也、罷出後者、禰宜

一前・承仕一前・宮仕一前・鐘突一前、二人合、禰宜者錄物三斗、長、

御幣四枝・厚帛一帖・散米・手袋・覆面等、年預用意之、於今度者、雖奉渡

三所、於御供者、乍四前調備之也、

一鎮守別社白山御殿檜皮棟救前修理事、

正安三年辛四月十三日子尅遷殿へ奉入之、役人布留社武尾子宜、（禰）覆面・手

袋等無之、只此御祈ニ厚帛ヲ十枚賜之、御座之荒薦者、自本御殿之内御座云

々、仍無其沙汰、御遷殿ハ大御前之南脇之藤之下儲之、御假殿ヲ依無番匠、力壽太郎之葺工ニ仰令造之、件御殿者一向木板也、御前ニハ懸簾、御供者只洗米許奉備之、四坏、其後十四日仁只一日之内奉葺了之、又同十四日夜子尅ニ奉成御歸座了、此時モ如前夜、（寅時）其後又洗木四坏、三貴口御酒一提備進之、散米一升長、中帛二枚賜之、神人之饗應ニケ度、（日別賜之、一ケ度也、）番匠饗

巡催之、錄物用途百文賜了之、

御修理之檜皮者三困入了、半繩三房・檜皮繩三房・竹釘三升・金釘五十二連、

以便宜西大門加修理葺、作祈下行、大工五斗、下斗定、伴二人清綱、三斗（下斗）

日別（七）清長三斗、同上、

一藥師院愛染王作者 雲賀大和君、

厨子番匠千鶴三郎大夫、梵字（鷹）小河僧正、銘高司殿、

一雖別院家佛生院堂修理葺并唐門棟裏事、

大工伴七人 大工行友四郎權守、引頭行長石三郎大夫、長二人（久成德石三郎大夫、是清次）

郎大 連（友氏）行（小法師）太郎大夫、久繼（春德）三郎大夫、

棟裏、

祿物下行事、大工三貫 引頭一貫 長二人（久成一貫、是清八百、） 連四人（友氏七百文、久繼六百文、行繼）

依從下向、中間餅（二百文）、行光（五百文）、

饗新（一斗）ヒメ新（一斗） 酒肴酒二瓶子一斗、瓜十合 （シム茄一合・光クリ一合・）

合、 牛房一合、油一升、枝大豆

□□事、自七月二日至廿一日大略一人ニ延ハ百四十日許敷、中間ニ斷絶、

人數多記故也、眞木小樽五千支、本所引之、今六百支許ハウラ皮四百支許敷、

今二百支許ハ葺工引也、十三石五斗下行葺、下斗定、竹釘大二百、但五十許

余、小釘一石、（但三斗余、如本小目出造故也、）

棟葵具軒切 麻苧・麻布一端・餅六折敷（本斗、）木ヒサケ一酒一升入之・綿二

斗、

斗、

兩三分・眞孛六結・厚昏二帖・白米二升・膝突布一端・莖一枚、七尺、

〔內山舊記拔萃〕

內山事號永久寺、元名大昌庄、

代々曆記并古老傳等、隨勘得就聞及注之、

于時文保元年十九日藥湯療養之隙矣

一 寺塔并大喜院等事、

本堂一字

或記云、保延四年始造營云々、但寺號已永久寺也、當知永久年中草創歟、

是寂初所作建保七年壞移廣瀨金剛寺堂云々、是所改作今正面一佛則彼寺本尊

也、後三尊本佛也云々、觀音爲修正・修二月本尊安置之、多聞天康慶作云

々、康緣云、是古佛□、大黑天神建長七年運賀大和公作之、賓頭盧正元々年

覺圓上總法橋、作之、十六羅漢多武峯追捕之時奉請之、後戶三千佛善心行善

房、宿願也、正應三年秋之比、爲彼遺跡沙汰圖繪之、中柱南方尊勝二卷儀

軌樣也、北方一局儀軌樣也、西方四本兩界万々也、又奉安置五粒舍利、

是本願本尊云々、以上古老傳、

眞言堂一字

古老傳云、保延二年建立、同年十月日眞言堂供養、導師小田原現觀房上人、

讚衆十二人、童舞在之、兩界曼陀羅願主南仙房不知正字、本願祇候人云々、母儀、本願

令與力給云々、西万々佛師賴圓、東方々佛師靈山房、東西障子繪、々

藤三宗廣書之、八神銘定信卿書之、所安置兩壇大威德・東壇金銅像亮惠上人

本尊也、西壇木像後年追造之、佛後障子漢頂十二天并裏四天、建長五年

九月重命尊蓮法橋、所書也、額弘誓院大納言入道所書也、曆代加新而已、

吉祥堂一字

白洛陽所移造也、年紀可勘之、本尊尺迦三尊則彼本尊歟、吉祥天女康慶作也、
靈驗異他矣、

觀音堂一字

爲懺法業沙汰、自結崎邊所移渡之也、本尊則彼堂本尊也、而堂舍雖渡于當

山、佛像捨置于彼跡處、於彼本尊之所、在連々有現異光、村民生奇異之思、

山侶拭渴仰之淚、則山僧隨信房雖奉迎之、未及安置之沙汰、空送多年間、

去建長五年加修理、復奉返安道場、三寸十一面觀音、元是鳥羽上皇御本尊

也、法阿彌陀佛笠置上人有子細相傳之、同奉安置當堂、阿彌陀佛元者嵯峨

大覺寺古佛也、不知定昭僧都之本尊歟、傳聞、弘法大師御作也、而當國□

士秀能奉迎、欲建堂舍、爰去承久天下違亂時、秀能蒙餘殃、被沒收家產之

間、不遂素願、空送星霜、然間長谷寺僧勸教房逢一寺炎上之時、則有小堂

建立之所存、爲本尊申請法阿彌陀佛、以奉迎此佛、然而不相應不能許容云

々、其後當山住侶定現房・賢仁房・勸教房又奉乞返之、以佛師運慶加修復

安置已了、于時建長七年歟、不動并八大童子、文永五・六兩年之間康緣尼

帳法眼、作之、山水之躰、風流之容、本寺僧長信房得業構之、俱利加羅一

躰同彼得業手自所奉作也、參詣之輩頂觀音普門之利益、仰信之族得明王二

世之冥助之歟、

常存院堂一字 廊 庵室一所

去弘長四年所建立也、其緣起紀具在別昏、當山止住院童號納王、往京洛、聊

出行之間、於路頭不處有喧嘩、爲掃部頭賴綱武士、家人等被致害了、致諸

寺之鬱陶、及九禁之裁斷、爰養父緣窓舜學房、不堪悲歎、以本尊阿彌陀如

來一躰并水田一丁餘、永寄附于當山、欲相訪彼後世、而問師範并管絃講衆、

且爲謝往日之舊情力、且爲慰當時之悲心、同意合力造立此所了、二天像者、

同年課佛師康緣作之、施主壇越行緣密蓮房、納平大入道日念房長谷川也、供

養唱導中道房上人、石塔文永四年八月日念房起立之、翌年供養、導師院主

行緣、請僧供僧云々、

御影堂一字

文永四年建立之、一向模寫高野山御影堂、大工宗吉、木像大師正元々年慶緣伊與法橋、先作之者也、日々之勤行、月々之影供、逢契三會下生之期、各致一山中情之誠矣、

多寶塔一基

保延三年建立、安置尺迦・藥師・彌陀・彌勒四佛、圖繪十六善神形像將又妙法華經、同年十一月十六日嘔七口淨侶供養之、導師一乘院僧正玄覺、願前大僧正舍兄、咒願齊實律師、周防守教基子、教相、散華堂達等已講五于時寺務、觀禪院已講、肥後、信慶、弁、勲仕之、瑠璃塔者白川院御塔也、本願人、安養院已講、修南院、、勲仕之、瑠璃塔者白川院御塔也、本願僧都申請而安置之、御舍利數粒內、元仁二年三月廿一日笠置法阿彌陀佛西隆寺一粒納之、同年四月十六日山僧現鏡房同舍利一粒納之、同年五月廿八日招提寺金剛房大同年舍利奉加之、奉懸十六善神、尊智法眼筆云々、九塔婆建立之旨趣、造佛寫經之妙願、具載供養日開白詞、在別番、專奉爲前攝政大相國・嘉陽院女御知足院殿長女、崇德院后宮、先師法印隆禪、得脫自力滅罪云々、依之以當山或號嘉陽院御祈願所而已、

經藏一字

永仁二年三月普賢寺殿御經藏有事緣所買渡也、奉安置彌勒并像一軀、去正元二年六月自高昌邊渡之、懷慶作云々、額照念院入道關白而已也、

鐘樓一基

大率都婆一本

西大門前在之、梵字源運攝津僧都所書也、

鎮守四所明神

建立年月奉請緣起、雖考山所記雖訪有識未詳、其由緒所詮伽蓋草創之往日、社壇松塙之本源歟、西向三所南端大河明神、牛頭天王是也、中央春日權現大明神、北端岩上布留大明神、南向利社白山妙理權現也、拜殿一字古者三々間也、正安二年有滿山群議、雖作五間訖、相障子者舊日之物也、畫圖英

算緣信房、筆跡也、年序相違、丹青漸消、仍尊蓮法橋重添口紛、但相撲形敢不加筆云々、松塙煙深端籬之月雖老、藁祠露暖金殿之風猶新者也、

玉賀喜社

弘安九年造宮、奉請弁才天、形像泰經弁法眼、本尊也、大慈三昧院前大僧

正慈信爲御願、同年八月廿五日遷宮、

溫室一字

承安三年造作之、十一月一日庚寅始沸湯了、同二・三兩日、

大喜院

寢殿一字・雜舍一字、本願前大僧正隱居之地也、

承安三年十月五日作始之、本願御記云、承安三年十月五日未時自筆色昏法

花經并四十九局阿彌陀經書始之、進後後之析也、尺迦三尊同書始之、三尺

地藏・法花經等同斷始之、房作事始之云々、誠是往樣之聖跡、曩祖之舊宅

矣、

智惠光院元號清淨光院、管原僧正實昭所構堂元自在此號故改之、

寢殿一字・堂・廊・雜舍・雜屋等、延慶三年作之、同年十一月廿六日移徙、

前大僧正尋覺所草創也、正和四年申入子細於龍攝、爲御祈願所殿下令旨、

奉行亮藤隆長朝臣、奉

一雜事

寺中水石

建長七年信堯房立之、

吉祥堂瀧

同八年二月同人立之、

大喜院池中嶋等石

文永四年同人立之、正和（一）年山僧胤乘淨春房、辰巳角瀧等少々立之、